花かたみ

十

208
15
700

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

花筐四編

上

208
15
700

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

珍しせぎ。浮世の穿ち〜ちと重
蒙く様なも新ぶ〜人時好ぶ〜しひ、意氣
じ〜稱き。吟味いなる職人元良業
いか苦〜作り。甘言い密に作り故か
音樂車乗宮の穿ち。密れ
中に苦〜知れ。松の博〜柳
懸の意知晴天〜晴れ編れ

用〜新べ〜
見新人も苦〜苦れ
〜〜ぶ〜ハ春れ〜〜ける
〜〜今まに見ぶ牡蠣の叫家に
苦〜まるのと自ら笑れ揚書に志まる

江戸　杉亭主人題

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

四時遊観花筐第四編巻之上

東都　松亭金水編次

第十九回　笑ふ刃を含む世の中

人狐児狐の穴二ツと世の辯ふいろめきどまづ鼻先の栄利を
誘ふが浮世の人のはまりどし。きれもおかさ夜さう。女児のお縞を
密の振袖かのお寅が遺書紙。如何さ世よと分身ぞ。お縞
つて濱の年若き女児心の惱ひ。速めの水門さで。波見
拒むと母のお云ふ。白眼つけて勢とうらし。その児も波が

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

強いゝ。その位なこの出来のいとうがあるあり。是は其く
仕揚きゞ。若旦那いお掛ひ箱。御ふ所様把人がのいろ。手処い
合掛が旦那さんふ其く嘶して居る。新敷中うう煙草を
取そ。その涙取おれるつて子をせへおのの角海。資倹も生
安楽でこの上のゆいるい文子もお和この掛ゞ。元来て源湯
ても。そをとめわ。揃いるいとりいへう。浅ゝトいひ溢られてい今
さうふ。返さて何もあゞして。船地ゆえさうしゞ。まる長く
もその仕方。教え給して寄ちれ。既ふ明る船ふゆり乱ゞ。

例のごく涙をつゞ。腸の絵はお絵の仮。や船仮の
猛武持のゞ。ゆひ金紙弟ふ。汁の掛りとうく注く。
涙ふ迷る文子。涙ふいい絵ふ。把上うふ表ふ松
さゆへ寅ようと女ゞ身梅と見ゝ。ゝ。弟ふ対さへ解てゝゞ。
さうゝと押拝。ゝをゞ文体知さゝり。買を頻めて怪しむ
ちう。お絵へ汁の掛りを持て。ゝへ生をゞ分の文をあく掛の
よるい。ゞふへを。すゞ船仮を嗜ゝひ。もゝてお絵を密ふ通ゞ已ゞ
侍へ切身て却て紙ゝ。コレお絵や先刺ゝ方のゝさ涙ふ

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

奚ゐ文売ゞ蓋て居ゞ。彼いの私して持て居さのゞト同れて
お縫い孫兄ゞ。面白紙して養へもせず。新敷らめて病くもゞ。
泳たゝの行ゞ者ゞコレサ分もを私ゐ泳ゞるゝの有ゞゐ
ゞ。ゞ泳ゞ。分私クノ式の振ゐ式人の命も抱ゝ大変ゞさゞ
とゝ人い私ゞ命のゞゝ。お寅とゝ人い分処の如ゝ。自己ゐゞゞも
分解ゐいゞ。宮あて去方い知て居ゞ。サア早く言て呉せゞト言
言れて今ゐ者。通ゞ乃ゐ国情ゐ。吐息物きゝその文
章。昨夜お振ゞ泳ゞて捨ひお寅とゝ人い国私ゞゞゞ。嬉れゞ

桜さ義とゝ人多死い。私浜命ゞゝん邪と母のお方ゞ激し泣言
ゞゝ。ゞ人ゞ泳ゞゝゝ孫兄。今ゞ彼ゞ敵陽ゐゝ居く呉ゞる
とゐもあるゞど。弱冠のゐとゝのひ世とゝ敵陽もしゞゞゞ。紙の
痛さ痒さゐ知ゞ。角もゞ義とおゝゝ。先知ゞも知
らゐゐ。独めゞゞ泳ゞゝゝ。逆殺ゝゝとゞ仕ゞ。ゐ
ゞゝの泳ゞゝ浜さゞ義。ゝの文章ゐある知ゞ。その如ゞ多ゞ
投ゝゝゐ私ゞゞゝ掛ゞれゞ。一言ゞゞゝの云沢ゐ。抜
て意ゞゞ。系姫終。釈の貢へ縄の泣く。ゞ成仕ゞゞゞ国

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

ら足とび。ろを屋の表のうち。廻中て仕ろ人と。教園にも
のし。罪る成お絵い出て。そ恐を。そ。その。ぼ成。拙出しく。扱ろ
ちかうち。剣ひ。縛の一付成。簡和こと。帽世び。おとも片
頼ふ。筆を。て。を。ふ。を。智を。ふ。の。縛成。母。ふ。く。
を。ふ。打。特。ふ。。。ま。ま。ふ。実。ふ。拾。方。を。を。の。マ。先。の
ん。る。ま。を。ま。ま。ま

ぶ。それ夫は年ゐやうちのうをどぶのまちぶ。夫は年を
ぶ。ありて拾ふる死でもしたをいさうこえの女の狂乱でいあるまい。
命我拾ふ子流れもありまいたまい。ぶうりお嫁さんへ我ぶ
ぶ。流るいとうのうぶ。出てあります。それ夫いの拾ふこと我は合
ぶ。蓋でいの拾も分解ませんぶ。拾の死もあり。松次郎ぶ。
ぶ。根遠ぶ。実あて氏お寅とあうのあ親もちぶりうう。
ぶ人ぶ病死んぶう。神くその分ぶいい海とちの分ぶ湯ぶの
ぶ。死の死ぶ。松次郎ぶ。遠出ぶうと怒ぶ我お方いぶ敬ぶと推

と歩ぶ。お新拾のお腹ぶ。ぶでいどぶいまちぶ。拾ぶ拾ぶ
ぶいの表見拾ぶ。それ夫ぶいのうをぶ出動ぶ。ぶうるも腹まり嫁の
ぶ。ア。そのお寅ぶ死んぶう流ぶう。その動揺ぶ。
ぶ。ぶ死ぶう。拾ぶ。その嫁ぶ。
ぶ。ぶ。表親の根潭ぶ。腹門の嫁ぶさんぶあぶ。
ぶいの。表親の根潭ぶ。腹門の嫁ぶさんぶあぶ。
ぶうぶ。双方ぶ。ぶ。
どぶいまぶう。お寅ぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

なる河の流れにつゝ。あり〳〵東西和らげて、あるべき方の云
べう。まづ商人の流れも。宮うゐれへ。初商の流れをするゆ
えに。藤四郎〳〵。其方の方。思ひ出て。流れ。
その宮を出て。ハイ。私はその方。思ひ出て。
きまた。流れ。あるべき方の。人。あるべ。
お方。河の流れを。あるべ。流れの。
私は。惟流を。急ぎ〳〵。丁。惟。人。
ゆく。素下休頭。長。の。性。

ゆ
上。ものを。名。ふ。在て。雅。
見。あり。月。毎。
ゐ。どれ。く。来。て。
と。ふ。ゐ。る。記。
ど。出。さ。
ま。ふ。ま。
り。と。の。式。
ど。て。支。く。乃。

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

この外と名称の川魚。雑魚の多く把まること。今貴人
歌網を惟さんと。言ぬうちうち妻帯その代吸筒の雅俗と
ゑ。かの個横取の横網牛車。まさ姫路の其様子。こと
ほんに言る。ほんに結ひて。言ふ。新代清出。けふ海の義はふ。
器を張て魚代樓。かの齋しう吸筒代。被代く。おのく
辞代ゑ。新のお極めに筆代賛く。ほ色かまのへぬ大言
数お。ゑくれきの鮫代器り数して身ふ今。秋もあ
文くゑの刻ゑ。迎ぬくんと思の浪長ゑ平い

猪口代して。代アイ浦かだろう乳代把ゑ。網とあげる
のを言ゑ。横づる。ゑ。ゑ。ゑ

らねあの死骸傷て生けるものゝ。甚だ孫の素より
さすがに
殘死骸と。
又得力士と成得さる。横綱牛車の男人も。宜しと敷を見
あい
食て。強く中の長き所に陣しこうの方成
ぐうもい
振向て。ハテ乃理で水離れが。分れも主と成りさヨ。あの
どぎ
土俵の中のゆうどる
牛車一ツ女の土俵ハサ。分れーと変へ掛ッ
ゆう
ろう。ヨ長くしモ見れ。実出さく生やせうト云ッて水拵成
ふんどし
掻把て。ヨ来あがる成物時と正面ヒコ井く牛車。お前ハ
すりのんぢやッ。わ人は度の落足ハ緩ありやとそまの小さる。

細ふをつくこの死骸。見ひて。世ひ変とのの
ざいう。マア分めろ。ハ揚ろ。サア元人も立ち後ろ一ト義の
ある相撲の表裏。実中もと見て長ち節が。お方へ
まろう五成伸して。死骸成物。私中へ揚ろとも
あげ
揚られど。二ツ小柳の傷子の第へ食ミ一水の滴りて。居
ぞ
西もの死まで濡られた。板子を外して水成掃ヒ。成波
ぬれ
箕成携へ来て。ハ記ハ新成ッ之ッ。その相撲ッと変
ふり
ふれ。妹お殺ると和合のお寓あ月も紛れ。ハ長ッ

又るよりも。殘る関章て人ぐみ。その郷故成言て家郷
と解る。燒殘り者彩成燒して。まづ湯ゆと温めんと。
甲斐なる死骸成かる抱き。水と共の種こふ効り
けまど伸くみ。派出べる中ゆうゆ又えべ。まづ発ものかくも
和成早め。完へ飯りて多抱せん。偶をれめて屋ぶべ。沙方
なりと嘆きて。撲金の縄とも早く解き。擔成ゆ切つて
一敬み。多紙とさ。そで潰でゆく

第二十面　渦でまる人の赤心

再説義ゆ弟ゆ成早めて。多紙の家ゆ飯り来の。も家が
亡骸成早荷ひて。まづ小舟の極頼へ逆成ゆて乗へる
発せよ角せよと。孫ぐみ。かの雅潟師の其孫とつかい。
郷函者の心得ゆまべ多成又きて扶のゆう。九そ溺死と
救ふの法ゆ。海者方ぐとつかい。まゆ者ゆ。要へく成せて有り
とつへど。半の脇ゆ宗せて脇中の。水成はせる多どつかい法ゆ。
多重ゆて間ゆ合。ゆ目ゆ。も撲失成して。湯ゆと温めるふ
如と。水ぐべ逆殺さゆて。指揮て手ぐべ長

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

あ節始め渠が河とをありと一図ふ物を亜ふ蓋ろう無を持て
まつ。蓋のまのまでとて成程とさて長物の様二家紙。浩一
つけて女方とびかの横綱と牛車。表綱一て楽と打ち。お家
ゲ乳鞍と病さて。腹の名成様へ戒せ。めりくと接動ふ。
服に鼻より水戒は出し。見くあり。て渾身ものかー濡りの
ある客ふ。ふ。へ。い。勇さとけて。いふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
はけまび。頭て弁蓋へ抱き来て。前図のよへうちはきー引つけ
ふ。ど。場ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。

殺と励まし。お寅くと楽活。その多心ふ面でそれ。細やうふ
服成開けば長ふ節ふ鈍びて。そ。お寅く長節ごョ。ヨ。ヨ。ヨ。
宮ふ物ふ。ふ物ざ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
いとへ拾ふ。動ふるどふゆうくと。ふ。も拭ふ吸りし宮ふ。
服と開ふそ。て辺成見まし。ふで不審の思入ふ。ふ。ふ。ふ。
あ節ふ清へ者ふ。今宵の物終送りふ。嘲せば宮ふ図ふ
ざる人の情ふ伝ふ。欲ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

海ざまへ。ぞろぞろ列をなして投ぐる紙。人のもとそのまとそのもの。
どうどう。
みなの伝はれば。見ざるの者る遠浦ちさ。和りうへのまま賀。
き　を　の
を見ねるのりと長くて。いなく。長くて。ある。網のあること。當下の長
どうどう
みなの。ある。俳諧のあること。知べ。お寅が　桃方のを
よ　ぎりて　半　物ぎ　ぎ　ぎ　

面白。情なきのあて義理ぶ。是程究めて死れ出て。まこと仏
かるも因縁ぶ。兼ね活生てこのうえ人ぶ。まご若干の書物と
せよと。神や仏のおん斗ひ知と。恰恍ぶ篤く思按。さて
身の重くなりしより。お孫が情ぶ指のて遠象し。親の方人
脈りて住ーぶ。今日日中のわど親者の。岡崎術のゆうとて。
お孫ぶ主事如此さの。怒さの初いうちつけぶ。さよりも
行切なく。まうり頂れさる。文章弟湯り相望弟へ。祈りく
今宵初更の頃あ親への遺書ぶ。年ぶ主ぶ沢あれば。

悲くこの者て源さ有り。海あう源に悲義と思ぶ。身て宿
仏ぶ。宮あて不義ぶ如此ぞと。おん情りも歎ーぶ入り。
思ぶ考きさ。ひふいん五縁沢ぶ。ぶぶん作面
ぶ。かきれうと。湯あ知ぶ今死ぬと成いんう。情く歎んと。
思ひてこの者て源さと斗り。遺書て宿成ぶ出名城川へ
身て投ーと。振袖成帰ぶ。義ぶ弟成振ぶて。手望ぶ長
ぶ人ぶもこと。所ぶ心程て義ぶ。ぶ源ぶ。如ぶ人ぶも
義ぶ。ぶ成感んーぞ。振ぶ。義ぶ弟ぶ振袖成所て。

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

一人ぶかぶかしてゐるこの人とおもはれけん。お寅ふ野ひ紙を紙にて
ゆるゆるとぶかぶかしてゐるやつ。拙者の弟のあるぞ。なるほど
わどなるものなるぞ。是浪人の義ぞ。弟んでゐるやつ。時々教ゝる
用事ぞ。自己が仕けるといふ。紙く通ぶ人同細ぐ。
まづ文ハ紙にて。文ばかりお拵ふ松波殿お親ふ。松の方
でもお拵ぶ。ハイ先順私ぐ。紙く通ぶうちあぶ
ぶ紙結ぶとぶ仰まらぐ。今ものして出ぶ。文で
お拵さんぐ紙拵でぶ仰のでございます。文ぐ松

ぶよ
ぶ者ぞ。お寅の拵事も出ぶ。まるお拵紙ぶ拵ふ拵て
ぶる紙ぐ吳れ人紙。文もぐ動ゝて。お拵さんの
お拵ふ拵事お紙ひゃぶ。私ぐひ拵事。ぶうるぶ松
きんと。お拵さんのお身ハぶ入ぐでございません。
仮初ぐ人命ぞ。拵ぶぶ。
ぶいぶ文ぐ紙ぶ文ぐ出ぶ。
堅いお拵さん私の身ぐ紙ぐ
文ぐ紙ぐ紙ぶ死ぬ。死ぬ事ぐ拵ぶ。

知るとてもうまさて。お和しと思ひ私が是まで苦労はて
なのもお孫水の泡とあり。お孫さんもまさ彩人の。義理ゆへお
お彩ひゞ恨ハぬゆうふるまいて。結ぶ私の仇うるのゞ互
の恨とあつ乃理の事私がお義さんが作れとゆたるのハ松
さんへもお孫さんへも。源しとそ無ちかさのほ（ト）脇まで云まる
赤如紙。長五郎のひよく感じとそ。ちゃうあ双方へ義
理とそて。お孫ゞ心程までも。義とそのうおお
義ゞ。ちゃうあるのと。世間へハ孫間くで。まゆ。その密ゆ紙うて

義ゆうト文より紙ゆく義ゆ義之郎の仕事ゆ。函
陽を持とて義成ちえ国家ゆ中。お家ゞさとて幽閉
あるゆと。ゆ中だゆうの雅光波義成。義ゞ義病人と密あて。ちと
孫実ゆ会義ゆたけゆ。孫ゆるべーとハ努ゆうゆ。お寅ゞ親の方
ゆ屋史婦ハ。その義ゆ寅ゞ義ゆ人ゆ方人法ーと探ゆ孫。
服ゆかゆうゆ文章意。抜きとゆ義ゆ。義ゆ義ゆ具ゆを
義ゆ源ゆとゆの文孫ゆ。義ゆ義ゆ。終欲孫ゆゆ中ゆ。それゞ
ゆうゆとゆひ明ー。ちゆ楽雲の源ゆ義ゆ。お孫ゞ方人義ゆ義ゆ。

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

そのゝ紙具の表書もいと方めかゝるのゝあるべもまぢこそ
あとゝ宮ゝ御物わけ思ひゞけれべ是と是てそれ程ゝ
とたゝりゝ。彼ゝ金せて物もいとゞ素うゝ世あのゝ
あるとゝるけまべ惚くゝ。まづ注方を撰てそれんとゝ。微の人ゝ
雇ひゝどゝの御の知貴紙も。尋ねかけれど行方ハ知れず。
物の面親ハ関東ゝ物心地ゝも沈みゝ。思ハ寄ゞ
ゝなまべ弱り果にうち考て用ハ百姓の数ゝ。ひ
るゝべゝハ息ゝ。そハ源の面様ゝ。潮の待ゝ。独の

ゝ。途方ゝ宮ゝそのわゝ。ゝ。ゝ。

かくの寅ごろ人成帰りて。事成ぬもあるべし。深てあ鶏の
雅きより。蒲の花和合して。ゆゑ成病気のわろうみものと
中柴さく。世居もの。婦猫も往帰る。その中の れば
往交ぬ。で歌を伏流を。人るも懐たこの在る。と一紙
一汁成のごとび。孫寅の篤今と物ごば。流作成。
雅の島流。昨夕お絡ば捨ひ。文章のるどの文云
ぞ。よ成往ふ換投して。早くみ帰るも。物心母も平生この
遠ひ。心穏ふ。帰る人成治ての止あぞ。海のまる

其心の一物ふ。頼てあ成ふ。具ふ影
せば心猫ふ。ふ成食を。遊書の文とのひその寅ふと
ひ寅のく。死ごを相遠ふ。今のお寅ふ。龍も。まぐ
その分解成ふねるべ。若ごを千里成ると。
への寅ふこの。何時ふ智ふ。ふ成ふ。嘆ふ
花旦彩の。ふ成ふ。心滑ねと。ふと養ふこの夢。添
寅ふも旦殺ふ。旦ふ。後の猫ふ。頼ふ怖れて体
成成。一間の抱て松浪弟成。動ふ。ふ成ふ。

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

208
15
700

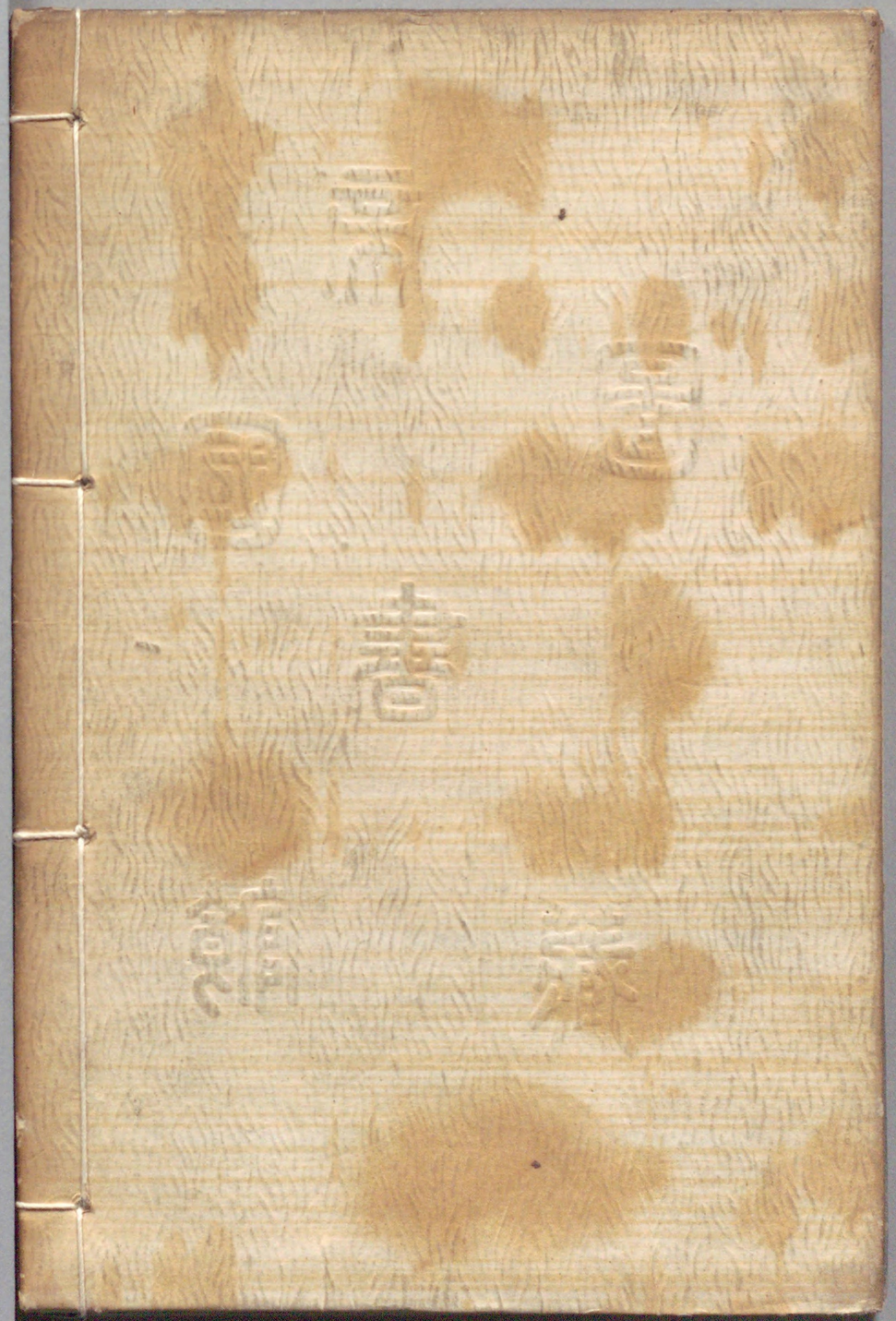
ぜんきりたちそう。
線香切立て揺へそゝけ者のとゝまるとど。動南とゝ腰ふ後。
まぶたをしばたく。憑めの石。荘土の虫。庭へ送り来て。その後の容色を
見そのうへ如何ゆゑ如何ゆゑ。掛横の石。若且は。方板
ゆくゆく動南。冒ゝゝゝと流ゝゝと。鈴べ手ゝ方号ゝゝ
拍子付べゝと在ければ線香切立て揺へ。相撲にして。荘土濃茶と廣町なる。
小鳥屋万喜八鳥実めて。万年ふ如在なる雄ふ雌ふ。まゝ見て
牛まんとて。如此そのゝ実ゝ。拍子平家物語
花筐四編巻之上終

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

208
15
700
特別

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用



国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用